難波田城だより

—難波田城公園・難波田城資料館ニュース—

平成23年9月1日発行
編集・発行/富士見市立難波田城資料館
第 49 号
NEWS from NANBATAZYO

水害時の助け合いの記録

市民学芸員　稲植（いなうえ）　保美（やすとみ）

荒川・新河岸川に挟まれた南畑地区は、昔から洪水のたびに被害にあい、その排水や堤の改修をめぐって隣村との争いが幾度となく繰り返され、争いの歴史が注目されてきました。しかし、その争いの影に村どうしの助け合いも行なわれてきた記録があります。あまり注目されてこなかった助け合いの記録を取り上げてみました。

寛保（かんぽう）2年(1742)の大水害の時には、久下戸（くげど）村(川越市南古谷地区)の名主であった奥貫（おくぬき）友山（ゆうざん）が蔵を開き、久下戸村をはじめ、周辺の窮民に米や麦・雑穀を与え、翌年にも数度にわたって近村を助け上南畑村に雑穀 4石（約600kg)、下南畑村に麦3石9斗、稗（ひえ）2石 8 斗を援助しました。友山が救った村は48ヵ村・10万6千人余に達しました。ときの川越藩主は友山父子を川越城に召し出し、狩野周信筆の鷹の絵一幅を賜（たまわ）り、その功労を表彰したといわれています。

上南畑村砂原で荒川が決壊した安政（あんせい）4 年(1857)の洪水では、上南畑村が代官に堤の修復普請（ふしん）を願い出たところ、村方の自力で修復するよう申し渡されました。自力での普請はままならず、相談を受けた隣村の宗岡村(志木市)から助合金 150 両を、下南畑村・南畑新田村からも50両を協力してもらい、自普請により完成させたといいます。

荒川・新河岸川が氾濫（はんらん）した明治 23 年(1890)の洪水では、志木町(志木市)の豪商の三上健次郎が、南畑村(明治22年に4村合併)に対して、洪水救助金(見舞金)として20円を上田岱弁（たいべん）（南畑にあった十玉院最後の院主。公園内に筆子（ふでこ）塚がある難波田直次郎の孫)を通じて贈っています。

東大久保の荒川堤防が決壊し、南畑村で死者6名を出した明治43年(1910)の大洪水の時には、福岡村(ふじみ野市)の福岡河岸問屋福田屋10代目星野仙蔵（せんぞう）が自らの所有米を出し、3〜4ヵ所に炊き出し場を設けて、船を使って被災民へにぎり飯を配ったといいます。更に大きな船を調達して南畑村の被災民を鶴瀬小学校に避難させたり、自ら自転車に乗って大井村(ふじみ野市)の有力者をまわり、にぎり飯づくりへの協力を呼びかけました。また、避難した人々には、羽沢（はねさわ）（富士見市）の人々が食料の炊き出しを行ない、衣服の提供なども行ないました。

救済にあたった星野仙蔵の記録を残す福田屋（現ふじみ野市河岸記念館）撮影:塩入たま江さん

以上は、記録に残る主な助け合いですが、それ以外にも多くの助け合いがあったのではないかと思われます。今回の「東日本大震災」の発生から間もなく 6 ケ月になります。この間、全国の市町村をはじめ、世界の国々から寄せられた支援もかつてない規模といわれています。今も昔も、このような助け合いが復興の大きな力となり、支えであると思います。一日も早い復旧・復興を心から願っています。

参考資料:『富士見市史』『上福岡市史』『水害と志木』『埼玉県人物誌』他

＊10月初旬から川越市立博物館にて、奥貫友山と水害に関する企画展を行います。当館寄託資料（大澤家文書）も出品予定ですので、ぜひご覧下さい。

こんなお宝がありました　資料館編

むしろ機（ばた）でわらむしろを作るビデオ

旧金子家住宅の土間には、編みかけのむしろ機が展示されています。筵（むしろ）とは、植物の繊維（せんい）を縦横に編んで作った敷物です。むしろは縄文時代からあり、材料はマコモ・ガマ・チガヤ・イグサ・稲・竹・藤など、製法も網代（あじろ）編み・簀（す）編み・こも編み・むしろ織りなどがあるとのこと。また、用途も広く、敷物・寝具・屏風・ひさし・梱包・農作物を干す・船の帆など、生活から産業の全般に及んでいます。

米・麦・豆の脱穀に敷くなど農家にとってむしろは必需品であり、わらで作るのが一般的でした。むしろ機は昭和20年代には、機械式に代わり、使われなくなりました。むしろ機そのものは、多くの資料館にあり、珍しくもありませんが、難波田城資料館では、平成18年に地元経験者の協力を得て、むしろ機によるわらむしろづくりの記録ビデオを制作しました。

このビデオには、織り方ばかりでなく、織り上がった後の縦縄や耳の始末、さらにケバ取りまで、経験者の生の音声が収録されています。

道具だけでなく、使用法のビデオも合わせて保存している資料館は少ないのではないでしょうか。この意味で、お宝としました。

おもしろ・なつかし体験㉝

シュロの葉バッタ

このコーナーは、難波田城公園での体験事業やイベントの紹介・報告・参加者の感想などを取り上げます。

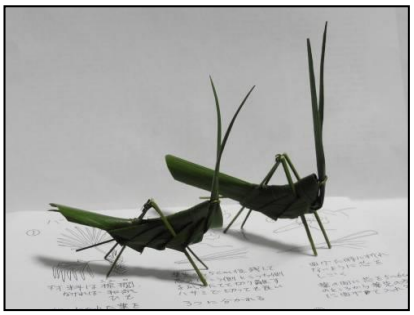
人の手を広げたような形の葉を持っているシュロ（棕櫚）は、農家にはよく植えられている木です。プラスチックの製品が出回るまで、ハエタタキはシュロの葉で作りました。シュロの葉は厚くしっかりしていると同時にしなやかさも併せ持っており、最適だったのです。

バッタは、昨年難波田城公園のキャラクターになりましたが、当館のバッタづくりは、数年前に某博物館でシュロの葉バッタが飾られているのを見つけ、作者の紹介を受け、講習会を催したのが始まりです。その後、ちょこっと体験の定番になりました。

シュロの葉は数十枚の刀のような小葉に分かれます。その小葉 1 枚を裂いたり曲げたりして 15 分程で作れます。

小学低学年では少し難しく、お父さん・お母さんの助けが必要ですが、出来た作品は本物にそっくり。

シュロの葉は乾くと硬くしっかりするので、飾り物にも最適です。ちょこっと体験でぜひ作ってみてください。「なんばった」もよろしく。



二匹のバッタ

難波田城公園
イメージキャラクター
「なんばった」

常設展示“外”説

末の松山

このページでは毎号、当資料館所蔵の資料を紹介していますが、今回は番外編として展示資料からひろがる歴史の世界を紹介したいと思います。

資料館の常設展示室では、難波田弾正を紹介するビデオを流しています。その中で弾正の逸話として「松山城風流歌合戦」を紹介しています。

松山城風流歌合戦

1537年、小田原北条氏との合戦で劣勢となった難波田弾正が松山城に退却しようとすると、北条方の山中主膳（しゅぜん）は次の和歌で呼び止めました。

あしからじ　よかれとてこそ　戦はめ
　など難波田の 浦崩れ行く

［悪しからず良いと思って戦ったのだろう
　なぜ難波の浦の波のように引いていくのだ］

弾正も歌で返しました。

君をおきて　あだし心を　我もたば
　末の松山　波もこえなん

［主君をほおっておいて他の人を相手しては
　末の松山を波が越えてしまうよ］

これは江戸時代の軍記物に登場した話で、史実とは思えませんが、弾正がすぐれた武将と評価されていたから生み出されたエピソードでしょう。

本歌

山中主膳の歌は「葦（あし）刈り」と呼ばれる伝説に登場する歌のもじりです。950 年頃に成立した『大和物語』の中では次のように語られます

生活苦を解消しようと別れた夫婦のうち、女は貴族と再婚して豊かな生活を手に入れたが、男は難波（大阪府）の浦の葦を刈って売り歩くつらい生活に陥った。たまたまその姿を見かけた女は

あしからじ　とてこそ人の　わかれけめ
　なにかなにはの　うらもすみうき

［悪しからず/葦刈らず/と思って分かれたのに
　なにゆえ難波の浦で苦労しているのですか
　＊心（うら）/浦　住み憂き/澄み浮き］

という歌を贈ったが、贈り主が誰か気付いた男は返歌のみ残して姿を消した。

軍記の作者は歌の語句だけでなく、二人の運命と両軍の盛衰も重ね合せているようです。

難波田弾正が返した歌は、古今和歌集に収録された歌そのままです。本来は、恋人に心変りしないことを誓った歌ですが、それを君主への忠義に読替え「末の松山」を扇谷上杉氏の最後の拠点である松山城に重ねたのです。

宮城県多賀城市末松山宝国寺
本堂裏の松が立つ丘が芭蕉も訪れた「末の松山」推定地。点線が平成の大津波の到達した高さ。本堂階段の1段目まで浸した。付着した砂などを清掃せず意図的に残している。

かつての日本人にとって文化的な素養とは和歌でした。軍記物の作者は、このような歌の世界の広がりを読者が連想することを期待したのです。

新たなる解釈

ところで、末の松山の歌については、近年、自然科学の分野から新たな解釈が呈示されました。

この歌は「みちのく歌」で、東北各地に歌枕の推定地があります。10 数年前から、仙台平野などの地質調査により、貞観（じょうがん）11 年(869)の大地震が岩手県～福島県の沿岸に巨大な津波を起したことが実証されてきました。地質学の清水大吉郎氏（故人）は、この津波の記憶に基いて、松の生えた丘を浪が越えてしまうという歌が生れたのだと推測しました（地質ニュース 2000 年 9 月号）。

古今和歌集は 910 年頃に完成しましたが、890 年頃の寛平歌合（かんぴょうのうたあわせ）でこの歌をもじった歌が詠まれているので、すでに都では有名な歌だったようです。大災害から少し過ぎて記憶に基づく歌が発生し、都まで広がり、という時間経過がたどれそうです。

軍記物の作者は、この歌が津波に由来するかもしれないとは、おそらく思っていなかったでしょう（慶長 16 年[1611]の東北地方の大津波を知っていた可能性はあります）。しかし、歌合戦での弾正のふるまい（小さな事にとらわれず、逃げることを優先する）は、津波の危険があるときの行動原則に一致しています。たとえ偶然の一致でも、そのようなイメージを重ね見ることで、物語の世界が広がっていくようです。

参考文献：山本啓介「“末の松山”を波は越えたのか」『日本文学』平成 23 年 8 月号

＊＊＊秋のイベント予定＊＊＊

●企画展情報

平成 23 年秋季企画展
「遺跡が語る富士見市の中世」

富士見市の中世遺跡を発掘写真や遺物、図などで解説します。今までの展示で紹介していない中世の出土品や最新の調査成果などを紹介します。
会期／10 月 22 日（土）～12 月 25 日（日）
会場／難波田城資料館特別展示室

マイミュージアム「８７才の写真展」

市内南畑に住む渋谷進さんが撮り貯めた風景写真などを展示します。
会期／9 月 15 日（木）～10 月 10 日（水）
会場／難波田城資料館特別展示室

穀蔵展示「夏を涼しく、冬を暖かく」

エアコン普及以前に暑さ寒さをどのようにしのいだのか、生活用品や写真などで振り返ります。
会期／8 月 6 日から約 1 年間　会場／穀蔵展示室

●ふるさと体験「藍の生葉染め」

藍の葉で絹のストールを染めます。
とき／9 月 10 日(土)午前 9 時半～正午（雨天時 11 日）
場所／旧金子家住宅　定員／10 名(申込順、初参加優先)
申込み／9 月 1 日(木)午前 9 時から、6 日(火)までに直接または電話で。
詳しくは、広報ふじみ 9 月号をご覧下さい。

●古民家寄席

とき／9 月 18 日（日）午後 3 時 30 分～5 時
定員／60 名（無料、受付は午後 3 時からです。）
場所／旧大澤家住宅　出演／桂小南治（落語）、鏡味味千代（太神楽）、神田真紅（講談）
主催／難波田城公園活用推進協議会

●第 17 回ふるさと探訪

川越街道大和田宿と戦国の城「滝の城」を訪ねます。
とき／10 月 2 日（日）　集合／武蔵野線新座駅
申込み／9 月 29 日（木）までに直接または電話で
詳しくは、広報ふじみ 9 月号やチラシをご覧下さい。

●思い出の布で バッグ・インバッグづくり

カバンの中の小物整理に使えるバッグ（15 ㎝×18 ㎝）です。用意した布（裁断済み）を使い、縫い方を教わります。（＊布はこちらで用意しています）
とき／10 月 5 日（水）午前 10 時～午後 3 時
定員／15 人（申込順）　指導／美楽の会
参加費／100 円　申込み／直接または電話で
持ち物／縫い針 2 本、まち針 10 本、木綿糸（白）、ハサミ、昼食

●やさしい拓本体験教室

とき／10 月 16 日（日）　定員／15 人（申込順）
参加費／500 円（材料代）
指導／資料館友の会拓本部会
申込み／直接または電話で
詳しくは広報ふじみ 10 月号やチラシをご覧ください。

●秋の古民家コンサート

今年はオカリナの演奏です。子どもから大人まで聞くことのできる様々なジャンルの曲を演奏します。
とき／10 月 23 日（日）①11:00～②13:30～
定員／各回 100 人程度（無料、受付あり）
詳しくは広報ふじみ 10 月号やチラシをご覧ください。

●ちょっ蔵市

（難波田城公園活用推進協議会主催）
９月25日（日）　おはぎ
10月23日（日）　ふかしいも
11月27日（日）　手打ちうどん
※時間は午前 11 時から。売り切れ次第終了です。

＜開園時間について＞

10 月から 3 月の間、公園の閉園時間は午後 5 時です。資料館と古民家の閉館も午後 5 時です。

＊上記の他にも、さつまいも掘り（10 月 23 日）、ふるさと体験「お月見だんごづくり」（9 月 24 日）・「手打ちそばづくり」（11 月 26 日）・「わらぞうりづくり」（11 月 3 日）など様々なイベントを用意しています。

編集・発行／富士見市立難波田城資料館
難波田城（なんばたじょう） FUJIMI MUNICIPAL MUSEUM
〒354-0004 埼玉県富士見市下南畑 568-1　TEL. 049-253-4664　Fax. 049-253-4665
富士見市役所公式ホームページ　http://www.city.fujimi.saitama.jp
◆資料館休館日／月曜日(祝日を除く)、祝日の翌日(土曜日・日曜日を除く)、年末年始 開館時間／午前 9 時～午後 5 時◇公園休園日／なし　開園時間／午前 9 時～午後 6 時（4 月～9 月）　午前 9 時～午後 5 時（10 月～3 月）